



発行 **子ども新聞サミット**
 Children's Newspaper Summit
 【事務局】
 〒104-8433 東京都中央区築地 5-3-2
 朝日学生新聞社内 ☎03-3545-5225

授業にどうぞ
 新聞の印刷用PDFは、こちらからダウンロードできます。授業などにお役立てください。
<https://www.asagaku.com/pdf/kodomo21.pdf>

2021年
 (令和3年)
 初夏号



正しく知って自分たちで行動し、 発信し続ける!



今、世界にはどんな課題があるのか。そして、それをどうやって解決していくのか……。全国の小学生向け新聞の読者が「子ども記者」となって取材・議論する「子ども新聞サミット」が3月26日に開かれました。テーマは「よりよい世界をつくるために」です。記者たちは自分たちの取材をもとに、世界の課題を真剣に考えました。

「サミット」は今年で4回目。今回は全国21の新聞社から32人の子ども記者が

子ども記者 提言まとめ

参加しました。国連が掲げる17の持続可能な開発目標「SDGs」をてがかりに、記者たちは「国際協力」「多様性」「技術革新」「環境」の4チームに分かれて取材を重ねました。

新型コロナウイルスの感染拡大で、「日本科学未来館」（東京都江東区）と全国の子ども記者をオンラインで結んで開催されましたが、議論は白熱。最終的に、「正しく知って自分たちで行動し、発信し続ける!」という提言がまとまりました!!

小学生向け新聞の読者 サミットに集結

全国の新聞社が発行する子ども向け新聞の読者が「子ども記者」として取材し、その内容をもとに議論し、提言をまとめるイベント。2017年に初開催された。毎回、日本科学未来館（東京都江東区）を会場にしている。参加する新聞社が共同で、全国の子どもたち1万人を対象としたアンケートも実施している。

【主催】子ども新聞サミット実行委員会
 【後援】文部科学省、内閣府、日本新聞協会など
 【協賛】三菱商事、ロボット科学教育Crefus、浜学園、マックでおもちゃリサイクル

吹上心海 記者
子どもタイムズ

栃木県 那須塩原市
アジア・アフリカの
農業指導者を育成

ケニアのキリギアさん
「未来 見通し行動を」

栃木県那須塩原市にある「アジア学院」で、ケニアから来たキリギアさん取材しました。キリギアさんは被災者支援や農業の指導、こどもたちの教育サポートなど、困っている人々を助ける仕事をしています。「多くの人に未来を見通した行動を意識してほしい」と話されたのが、印象的でした。



全員がそれぞれ、国際協力で重要と思うキーワードを発表しました

国際協力の 共に生きる

現場レポート

「国際協力」の分科会には「毎日小学生新聞」（毎日新聞社）、「週刊かほピョンプレス」（河北新報社）、「週刊風っ子」（上毛新聞社）、「子どもタイムズ」（下野新聞社）、「親子で読む こどもタイムズ」（西日本新聞社）から計8人のこども記者が参加しました。

田岡真紀 記者
週刊かほピョンプレス

宮城県 登米市
進む！
ネパールへの水支援

住民の立場になって

ネパールの山奥の村で水の支援をしている宮城県登米市の桜井ひろ子さん取材しました。村では安全な水を確保するために女性やこどもが重労働の水くみをしてきましたが、日本の協力で水が通るようになりました。「住民の立場になって課題を一緒に解決することが国際協力の第一歩」ということを学びました。

尾本琴美 記者
今野匠深 記者
毎日小学生新聞

小久保英万 記者
鈴木聡真 記者
週刊風っ子



今の夢は、まずオリンピックにでること。ナショナルチーム（南スーダン代表）として出場して、ベストを尽くしたいな。

スポーツ通し平和促進

南スーダンの陸上選手 長期合宿中

2月、群馬県前橋市で長期合宿トレーニングをしている東アフリカの「南スーダン」の陸上選手たちを訪ねました。

南スーダンは2011年に独立した世界で最も若い国です。しかし、民族対立が絶えません。日本の国際協力機構（JICA）では、協力の柱として「スポーツを通じた平和促進」を掲げ、国民スポーツ大会を支援してきました。東京オリンピック（五輪）・パラリンピックの出場を目指す有力選手4人とコーチの合わせて5人が、19年秋から前橋市で合宿しています。

尾本記者と小久保記者は、前橋市スポーツ課の桑原和彦課長に前橋市が選手たちを受け入れた経緯や目的、選手たちの普段の生活ぶりなどを取材しました。

英語が得意な今野記者と鈴木記者は、2人の選手に英語でインタビュー。選手たちは「市民のみなさんはすぐ親切。恵まれた環境で、充実した練習ができています」と答えました。最後は練習にも参加しました。

平田桃圭 記者
光安さよ 記者
親子で読む こどもタイムズ

福岡県 福岡市
日本で暮らす
外国人を支援

内なる国際協力

日本で暮らす外国人を支援している福岡市のNPO法人「グローバルライフサポートセンター」取材しました。キーワードは「内なる国際協力」。現在、日本では42人に1人の割合で外国人が生活しています。フィリピンや韓国出身のスタッフに話を聞きました。

大切なのは、日本の文化やルールをわかりやすく説明できるようにすること。また「困っている外国人＝かわいそう」ではなく、「外国人＝ひとりの生活者」であることも知りました。内なる国際協力を実現し「外国人と共に生きるやさしい社会」を目指したいと思いました。

鈴木聡真 記者
活動報告

友達と「クラファン」、ロヒンギャ難民を支援

群馬県館林市には多くのロヒンギャ難民が暮らしています。昨年夏、友達と一緒に「クラウドファンディング」を呼びかけたところ、目標10万円に対して300万円以上の支援が集まりました。昨年12月には、文具やサッカーボール、縄跳びと毛布を送り、学校の壁と屋根の修繕費用を支援しました。



者は、2人の選手に英語でインタビュー。選手たちは「市民のみなさんはすぐ親切。恵まれた環境で、充実した練習ができています」と答えました。最後は練習にも参加しました。

◇このページは、毎日新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました

尾本 琴美 記者 (奈良・中1)	今野 匠深 記者 (千葉・中1)	田岡 真紀 記者 (宮城・中1)	小久保 英万 記者 (群馬・小6)	鈴木 聡真 記者 (群馬・中1)	吹上 心海 記者 (栃木・小6)	光安 さよ 記者 (福岡・小6)	平田 桃圭 記者 (福岡・中1)
毎日新聞社		河北新報社	上毛新聞社	下野新聞社	西日本新聞社		

違いを認め分り合う

「SDGs×多様性」チームの8人は、多様な国から生徒が集まる長野県の私立国際高校やアフリカのスーダンなどについて学びました。

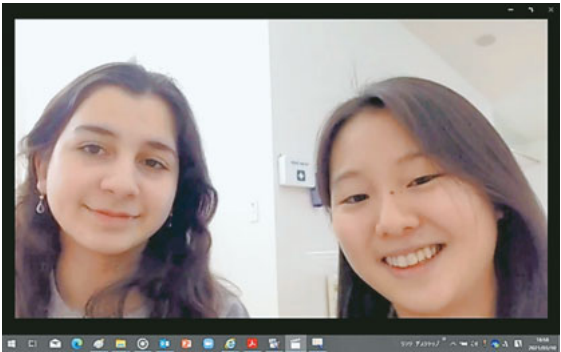
子ども記者たちは1月23日のSDGs学習会の後にオンラインで顔合わせをし、自分の住む場所や地域の特徴を紹介し合いました。長野、兵庫、広島、高知、大分、沖縄と、同じ日本でも多様性があることを実感しました。

2月27日の学習会は、長野県軽井沢町にある私立国際高校「ユナイテッド・ワールド・カレッジISA KJAPAN」とスーダンをオンラインで結んで開きました。アイザックは70を超える国・地域から生徒が集まり、全寮制で学んでいます。同校3年の伊藤優花さん(18)は、男子寮、女子寮だけでなく性的少数者(LGBT)のため

国際色豊か 全寮制の高校 水やトイレ スーダンの現状



水くみをするスーダンの子どもたちと写真に納まる頼田優花さん(中央)



アイザックの寮で友人と話す伊藤優花さん(右)

の寮があることや、食堂ではイスラム教の人に配慮した特別メニューがあることなどを紹介。文化の違いを肌で感じていると語りました。ユニセフのスーダン事務所から参加した水・衛生担当官の頼田優花さん(35)は、女の子が自分の意思に反して結婚させられる「児童婚」や「少年兵」などの問題を指摘。汚い水しか使えない人や、家にトイレがなく野外で排せつする人が多いことも紹介し、改善への取り組みを語りました。

子ども記者たちは、違いを尊重し合うことの大切さを実感する一方、子どもが安心して暮らせないアフリカの現状に思いをはせました。

子ども記者が住むまち

子どもにもできることある

青木悠里 記者
多様性は難しいテーマだった。いろいろな国のことを知ろうとするなど子どもにもできることはあると思った。

西脇武蔵 記者
スーダンの勉強をして、水やトイレに苦労している人が多いと分かった。自分も人のためになることをしたい。

小野悠希 記者
正しく知り、行動することで未来は切り開ける。世界中の子どもが当たり前に行き、安心して暮らせる社会にしたい。

上嶋啓太 記者
相手の立場で物事を考えることや、一つのことをいろいろな角度から見る大切さを学んだ。これからの生活に生かしたい。

相手の立場で考える

中瀬 堇 記者
多様性について深く考えた。人は違って当たり前で、その違いを楽しむ人になりたいと思った。多様性をたくさん見つけ、認め合っていきたい。

磯野心一 記者
みんな違うのがいいことだと分かった。違いを知ることが、相手を知ることにつながると思う。

加藤駿弥 記者
伊藤さんや頼田さんの話を聞き、多様性とは違いを認め合うことだと分かった。サミットを通じ、自ら行動、発信する大切さを強く感じた。

仲里芽依 記者
知ってからじゃないと、どう行動するべきかわからない。取材で知ったことを伝え合い、協力していくことが大事だと思った。

◇このページは、信濃毎日新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



あおき ゆうり
青木 悠里
記者
(長野・小6)



おの ほるき
小野 悠希
記者
(長野・中1)



にしわき むさし
西脇 武蔵
記者
(兵庫・小6)



うえしま けいた
上嶋 啓太
記者
(愛知・中1)



なかしば すみれ
中瀬 堇
記者
(広島・中1)



いそ のしんいち
磯野 心一
記者
(高知・小6)



かとう しゅんや
加藤 駿弥
記者
(大分・中1)



なかざと めい
仲里 芽依
記者
(沖縄・中1)



省エネに優れた電気自動車



愛知県名古屋市では、新しい電気自動車「オールGaNビークル」の開発が進みます。車の部品に使う「パワー半導体」の素材に窒化ガリウムを使い、電力のロスが減らした省エネ走行をめざします。資源を取り合う必要がなくなれば、平和な世界につながりそうです。



百年住み続けられる街づくり

神奈川県藤沢市のスマートタウンでは、百年住み続けられる街をめざす取り組みが行われています。住宅の屋根にはすべてソーラーパネルをつけて、生活で使う電力の30%以上をまかないます。災害時に備え、かまどに変形して料理ができるベンチもあります。街の人の交流がさかんなことも魅力的でした。



カルシウム不足を補う宇宙日本食

愛媛県東温市にある会社「キシモト」では、アジを使った宇宙日本食を開発。国際宇宙ステーションに運ばれ、宇宙飛行士の野口聡一さんが宇宙で味わいました。カルシウム不足を補えるよう、骨まで食べられるよう工夫。世界に通用する技術で、町の魅力を高められると実感しました。

使い捨てカイロからきれいな水が



使い捨てカイロを集め、中身を加工して水をきれいにする活動をしているのは、大阪市の会社「Go Green Group」。ボランティアではなく商品化することで、仕事を生み出し、作業の効率も高めています。身近なもので環境をよくするアイデアに驚きました。

環境や社会を変える 新技術

私たち6人のチームは、新しい技術を生かし、地球環境や社会を変えようとしている例を各地で取材しました。取材を進めるうち、環境の保護や社会貢献のために新しい技術を生かすには、人の結びつきが大切だということがよくわかりました。取り組みやアイデアを伝え、興味を持つ人の輪を広げ、考え続けるきっかけをつくる必要があります。そこで私たちは、こんな提言を考え、こども新聞サミットで発表しました。

環境にやさしい社会、平和な世界の実現に向けて、新しい技術は愛と希望、地域、まちづくりの未来、バトンにしてみんなの思いをつなぐこと、地球のすべての命、美しい自然を残すために使おう！

新型コロナウイルスの影響で、現場に行けなかったり、人と直接会えなかったりする中で取材をした人もいます。それでも、オンラインで当事者に話を聞いたり、バーチャル・リアリティーの技術で、電気自動車の構造を立体映像で確かめたりできました。



全国初のバス自動運転

茨城県境町では去年11月から全国で初めて、自動運転のバスの運行が始まっています。運転席がなく、動かすのはゲームのコントローラー。こうした技術は高齢化が進む町にとって助けになるのではと期待がふくらみます。



残飯を肥料や燃料に

食べものが捨てられる「食品ロス」を減らすことにも技術が生かされます。びっくりドンキーが運営する牧場「えこりん村」(北海道恵庭市)では、各店舗の生ごみ処理機で資源になった残飯を、肥料や燃料として生かします。子どもたちに環境への取り組みを伝える活動もさかんでした。

◇このページは、朝日学生新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



なま まな 楠 真奈 (大阪・小6)



こばやし りょうま 小林 聡真 (神奈川・中1)



やの ここな 矢野 心菜 (北海道・中1)



やすだ かいし 安田 開翔 (茨城・中1)



すがぬま せいしゅう 菅沼 聖修 (静岡・中1)



こだま りんこ 児玉 凜子 (愛媛・小6)



環境チームには、こども記者10人が参加。事前取材では、「環境のために何が出来る？」をテーマに、三菱商事社員として、アフリカでのビジネスに携わる横山雄一さん(26)と、人気書籍「ざんねんないきもの事典」の監修者で、動物学者の今泉忠明さん(77)の2人に話を聞きました。最後は、「環境について知ろう。そして、行動しよう」と提言にまとめました。

環境のために何が出来る？

横山さん(右上)から話を聞いたこども記者たち(1月31日)

今泉忠明さん



動物にとって今一番の問題は、地球温暖化です。動物は、暑さや寒さといった環境の変化に適応しながら生きていますが、最近の温暖化は、動物の適応力を超えています。動物の適応力を超えています。動物の適応力を超えています。

温暖化動物の生存に赤信号



カナダ北東部で撮影されたホッキョクグマの親子(前川貴行さん撮影)

北極圏にすむホッキョクグマは、氷の塊に隠れながらアザラシを狩ります。でも、北極圏の氷はどんどんと解けてしまっています。氷がなくなると狩りができず、生きていけません。このまま温暖化が進むと、ホッキョクグマは、2050年までに絶滅するのではないかと心配されています。

横山雄一さん



私たちは、イギリスの会社が行う「アフリカの電気がない地域に光を届ける事業」を支援しています。アフリカには12億人もの人が住んでいます。でもその半分の6億人は、電気を使えません。明かりが必要な時は、ガソリンの仲間の「ケロシン」を燃料にしたランプを使っています。でも、ケロシンの煙には有害な成分が含まれていて、体にも環境にも良くありません。

電気ない地域に光を届ける



ライトを使って勉強するアフリカの子供(三菱商事提供)

私たちが、イギリスの会社が行う「アフリカの電気がない地域に光を届ける事業」を支援しています。アフリカには12億人もの人が住んでいます。でもその半分の6億人は、電気を使えません。明かりが必要な時は、ガソリンの仲間の「ケロシン」を燃料にしたランプを使っています。でも、ケロシンの煙には有害な成分が含まれていて、体にも環境にも良くありません。

知って 伝えて 行動しよう



取材後、こども記者は「環境を守るために自分たちに何が出来るか」について議論を重ねました。一部を紹介します。(敬称略)

電池にためられるので、子どもたちが夜に本を読んだり、勉強したりできます。勉強すれば、貧しさから抜け出せるかもしれません。環境に優しい取り組みが、平等な教育を受けることや、貧困をなくすことにもつながっていくのです。



司会：横山さんや今泉さんの話を聞いてどう思った？
松山：私たちの便利な暮らしは当たり前じゃないことがよく分かった。
千葉：伊豆大島では、これまで気温が35度を超えることはなかったけど、去年は35.9度まで上がった。けっこうやばいな、と思う。
原口：日本にも色んな動物がいるけど、環境が変わると死んじゃうんだよね。

森あやの：動物のことを知って、何が出来るか、考えていけないといけないと思う。
駒形：電気のムダ遣いをやめたり、紙をリサイクルしたり、環境のために子どもが出来ることはあるはず。
吉田：マイバッグを持って買い物すれば、プラごみを減ら

せるんじゃない？
森瞭希：私は海岸のごみを拾うビーチクリーニングをやってみたいな。
阿部：僕は、寒くてもすぐに暖房をつけないで、服を着込んでいるよ。
正木：自分たちが環境につ

いて知って、伝えていくことが大切じゃないかな。
宮原：行動に移すことも大事だと思う。SDGsも、実践しないと何も解決しないよね。

【環境チーム】読売KODOMO新聞(読売新聞社)、まいにちむふむ(新潟日報社)、さん太タイムズ(山陽新聞社)、南日本こども新聞オセモコ(南日本新聞社)、りゅうPON!(琉球新報社)

◇このページは、読売新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました

- 正木 太一 (大阪・小6)
- 千葉 藍子 (東京・小6)
- 阿部 蹴斗 (新潟・小6)
- 駒形 笑 (新潟・小6)
- 吉田 大志 (新潟・小6)
- 宮原 幹 (岡山・中1)
- 原口 優徳 (鹿児島・小6)
- 松山 詩野 (鹿児島・小6)
- 森 あやの (鹿児島・中1)
- 森 瞭希 (沖縄・小6)



今の小学生の平均寿命は100歳を超えるといわれています。みなさんは大学を卒業してから80年から90年も生きていくことになりそうです。テクノロジーの進化によって大きく社会が変わる時代では、今までの常識は全く通用しなくなるかもしれません。ということは、基礎学力をつけるとともに、大人になってからも必要となる力を身につけることが、すごく大切になってくると思います。

自分で問題を設定し、自分の知識などや経験だけでなく他者の知識なども取り入れ適切な答えを出せる力こそが、大人になって必要となる力です。今までの常識や慣習を崩して、違う視点から事象を見なくては新しい考えは生まれません。

とてもわかりやすく丁寧に説明されていますから、これからも新聞や本にいっぱい触れたいです。

そして、今回のこども新聞サミットのように、いろんな人とたくさん意見交換をしてください。

籾 孝昭
株式会社浜学園経営企画部長

新聞や本を読んで生きていく力を身につけよう



私たちはロボットプログラミング教室「クレファス」を全国で展開しています。クレファスでは「日本の将来を担うグローバルで活躍できる子供の育成」を目指しており、理数系を楽しく学びながらプログラミングやロボットの製作を行なっています。ただ単に理数系に強い子どもを育てるのではなく、人類が直面する問題を解決できるような人材になっしてほしいという願いから、授業では様々な角度から物事を考えてもらえるように工夫をしています。

世界地図を見ながらワニのすんでいる地域のことを調べます。昔と比べて今はワニがすみやすい環境なのか、どうしてすみにくくなったのか、など地球環境の変化や気候変動についても子どもたちと話し合います。

SDGsの9番目の目標にある技術革新には、プログラミングが欠かせません。プログラミングで産業や技術革新の基盤ができると、様々な問題を解決する道筋が見えてきます。「クリーンなエネルギー」が実現したり、「気候変動に具体的な対策」が立てられるかもしれないのです。1つの問題を解決することでほかにも良

くなっていく、世界の問題はつながっていることに気がつくはずですよ。

こども新聞サミットを通して、みなさんが知ったこと、相談したこと、伝えたこと、それを実行するためには、どんな知識や技術や能力が必要かこれからも考え続けてください。より良い未来を築くために、深く考え、学び続けるみなさんをクレファスは応援しています。



岡崎 大介
ロボット科学教育 Crefus 学園長

より良い未来を作り続けていくために考え続けて



マクドナルドは、「家族の幸せと、未来を担う子供たちの健全な成長と発達をサポートすること」を目指し様々な取り組みをしています。その一環として今回のこども新聞サミットへの協力もさせていただきました。サミットに参加し、こども記者の皆さんから学ぶことの方が多くありました。「より良い世界をつくるためには」という難しいテーマに対して、一人一人が様々な角度から真剣に向き合い取材された内容とその発表は、多くの大人たちにも気付きを与え

るものだったと思います。

今回のサミットの中にも「技術革新」や「環境」という分野もありましたが、マクドナルドにもそれらに関わる「マックでおもちリサイクル」という活動があります。「マックでおもちリサイクル」では子供たちの遊ばなくなったハッピーセットのおもちゃを回収し、日本のリサイクル技術により店舗で使うトレイなどに生まれ変わらせるというものです。この活動はSDGsの12番「作る責任、使う責任」とも大きく関係して



大湯 緑
日本マクドナルド株式会社 ナショナル・マーケティング部

未来を担う皆さんと、より良い世界をつくっていききたい



日本では「電気がある生活」が当たり前ですが、アフリカの人たちにとっては当たり前ではありません。自分の当たり前をアフリカの人たちの当たり前と思わず、まずは「知ること」から始めましょう。アフリカの人たちをしっかりと理解し、何に困っているかを考えることが大切です。

三菱商事はアフリカの人たちの困りごとに寄り添い、電気がない地域に太陽光パネルと蓄電池を使って電気を届け

ています。環境にやさしい太陽光発電で電気を届けることは、環境問題をはじめ、教育、健康、貧困など、アフリカのさまざまな問題の解決に繋がっています。

皆さんの発表の通り、SDGsを達成するためには「知ること」だけでなく、「行動すること」が大切です。電気の大切さを理解できたら、家や学校で電気のつけっぱなしをやめることから始めましょう。そして家族や友人にも電気の



横山 雄一
三菱商事 電池事業部

まずは知ることから始めて、それから行動しよう！

大切さを伝えてみましょう。そうすることで周りの人の行動を変えていくことができます。

今回のこども新聞サミットを通じて、皆さんの行動が変わり、その輪が周りの人にも広がることを期待しています。

サミットゲストの感想

子どもたちの 自発的な学びと、 そのエネルギーに 感動

【プロフィール】
マラソン選手として、1984年のロサンゼルスオリンピックに出場。1992年に引退するまでの13年間に日本最高記録12回、世界最高記録2回更新という記録を残しており、マラソン中継の解説などで活躍中。



増田 明美

スポーツジャーナリスト

こども記者のみなさんはとても元気で、賢くて、かわいくて、自分たちが取材したことに關して、自信を持っていましたね。そのはつらつさにとても感動してしまいました。

最終提言は、関口修司先生がキーワードを提示して、こども記者を導きながら、私たちと一緒に頑張ってあげましたが、こども記者からたくさん意見が出たことがとても頼もしく、誇らしく感じました。最終

提言の「正しく知って、自分たちで行動し、発信し続ける！」は、21人のこども記者自らが体験したこと、体の中で感じたことから生まれたとてもすてきな言葉だと思います。

これからは子どもたちの時代です。オリンピックやパラリンピックの開催も控え、国際協力や多様性がますます求められる時代。若い子どもたちがこれから成長していくことに、大いに刺激を受けました。

関口 修司

日本新聞協会NIEコーディネーター

こども記者が主体的に調べて発信したことに頭が下がります。敬服いたしました。

最終提言は、こども記者たちが紡いだ言葉です。興味を持って、正しく知ることが今の子どもたちに本当に必要なことだと思います。自分たちで主体的に行動することもすごく大切です。行動するだけで終わるのかなと思いきや、こどもたちから発信するというワードがでてきたことがうれしかったです。発信すればより多くの人たちが一緒に行動に移せるからです。継続す

る、続けるというのは持続可能な社会をつくる子どもたちの言葉だなと思いました。

今回4つのテーマはありましたが、調べれば調べるほどそのテーマからどんどん広がって行って、環境とか人間社会のいろいろな課題に気付いていく。まさにSDGsです。こども記者たちは今の社会や世界を考える大人になってくれるんだろうと希望を抱きました。

最後に、子どもたちへメッセージ。頑張りすぎるのは良くない。疲れちゃうから、持続可能にならないから、ほどほどにする息長くずつと続くので、大人になっても頑張り過ぎずに頑張ってください。

頑張りすぎずに 頑張れ



【プロフィール】
社会科とNIE(新聞教育)を中心に研究し、17年間、群馬大学教育学部非常勤講師を務めたほか、東京都北区の3小学校の校長を歴任し、現在は、東京栄東大学、星槎(せいさ)大学で非常勤講師も務める。

困難な時代でも、 縛られず 行動を続ける ひたむきな姿

【プロフィール】
1952年、東京生まれ。東京の2つの小学校校長を歴任し、持続発展教育(ESD)カレンダーの開発やESD推進に携わる。

手島 利夫

日本持続発展教育推進フォーラム理事

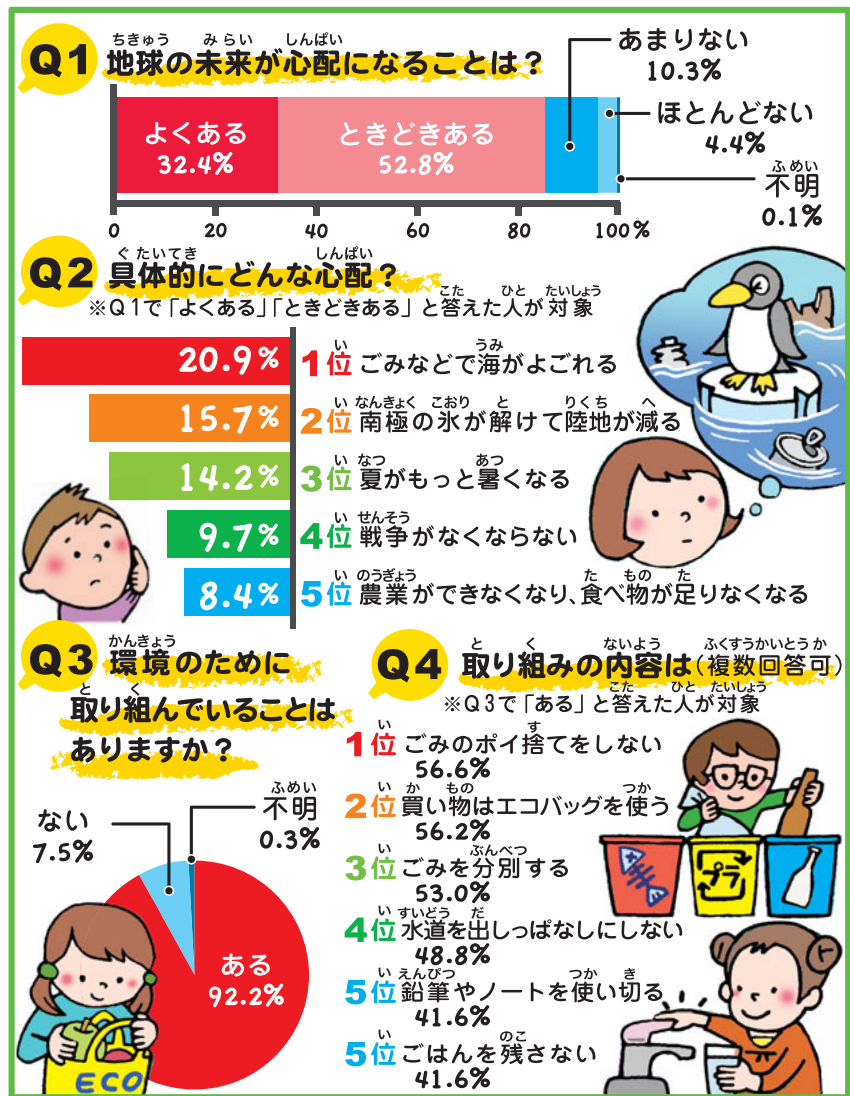
ものごとを変えるのはとても難しいことです。これまで大人たちは様々な困難を乗り越えて成功してきました。その一方で大人たちは、その成功にどうしても縛られたり、とらわれたりしてしまいます。でも、あなた方子どもたちはまだ十数年しか生きていません。しかも、とんでもない時代に生きています。この時

代の中で生きて、感じて行動する子どもたちが、これからの世の中をより良くする力を持っていると私は思います。期待しています。各チームの発表は私が想像していた以上でした。コロナ禍で対面できない中でも、提言をまとめあげることがすばらしいと思います。お見事でした。

地球の未来が心配 8割こえる

小学生にアンケート

約1万5千人回答



Q2の有効回答数は8170、Q4は1万3924 イラスト・林美香



手島利夫さん

海のよごれや温暖化

アンケートは2020年12月〜21年1月に実施しました。3月に開催した「こども新聞サミット」に参加した新聞社が協力したものです。全国の計21の新聞が呼びかけ、小学生約1万5千人から回答がありました。

アンケートをみると、1年生が計70・0%、6年生が計92・9%です。学年が上がるにつれ、危機感をもつ人の割合が高くなる結果でした。イラストにあるように、海のよごれや地球温暖化を心配する人が多くいました。

ニュースをみると、地球の未来が心配になることが多いのではないのでしょうか。全国の小学生にアンケートしたところ、危機感をもっている子どもが8割をこえていました。結果を分析した小学校の元校長先生は「こうした危機意識をもつ子どもたちに、リーダーになってほしい」と願っています。

東京の小学校の元校長で、SDGs(持続可能な開発目標)教育に力を入れてきた手島利夫さん(日本持続発展教育推進フォーラム理事)は、たくさんのお小生が地球の未来を心配していることに、対し、「大人として申しわけない」と感じています。「大丈夫と言ってあげたいけれど、かんたんにはいえない」からです。しかし、希望も感じているそうです。「よりよい世界をつくるためには、克服すべき問題が何

なのかに気づく力が大切ですね。危機意識をもって子どもたちが、リーダーとなって社会を変えていくのではないのでしょうか」

「SDGsを知っていいましたか」という質問では、「はい」が全体の48・5%。高学年ほど「はい」の割合が高く、6年生では74・6%でした。4人いたら3人が知っていることになりました。手島さんはSDGsが広く知られていることに驚いたといいます。「新聞や学校の授業でしっかり学んでいるんですね」と話します。

そのほかのアンケート

アンケートの方法 21新聞社の読者を対象に2020年12月〜21年1月、インターネットやはがきで実施。有効回答数は1万5104

- Q (質問) SDGsの17ある目標のうち、興味のある目標は? (複数回答可)
- A (答え) ①海の豊かさを守ろう(38.0%) ②安全な水とトイレを世界中に(33.9%) ③人や国の不平等をなくそう(31.9%)
- Q いま暮らしているまちに、大人になっても住み続けたい?
- A はい(79.3%)、いいえ(19.9%)
- Q 「多様性」と聞いて、思いうかぶことは? (複数回答可)
- A ①障がいのある人もない人もいっしょに働いたりスポーツをしたりできる(45.1%) ②はだの色や文化、宗教がちがう人がいっしょに暮らせる(38.7%) ③考え方がちがう人とも仲良くできる(37.3%)
- Q 日本が世界の国々と国際協力をするために重視する分野は? (複数回答可)
- A ①争いを減らす(60.7%) ②地球温暖化など環境問題対策(58.8%) ③貧しい人を減らす(48.5%)

真の原因つきとめて

子どもたちも地球の環境を守るために、できることに取り組んでいます。アンケートで「取り組んでいることがある」と答えた人は、92・2%でした。具体的な内容として、ごみのポイ捨てをしない、エコバッグを使う、鉛筆やノートを使い切る、などがあがっています。

「イラストを見てね。手島さんは「どれも大事なこと」と認めます。そのうえで、考えてほしいことがあるといえます。

こうした取り組みだけで、地球の未来を守れるのでしょうか。もっとちがう方法はないのでしょうか。

「未来をこわそうとしている『真の原因』は何か」をつきとめようとする姿勢を子どもたちに期待しているといえます。

「原因は一つとはかぎらず、さまざまな問題が重なっているかもしれない。世界の仕組みをひもとき、みんなの心を動かし、力を合わせて解決法を考えられるようになってほしいと願っています」